

# 禅定から解脱へ

—四禅・四無色定を通じて—

玉城康四郎

## 一 はじめに

この論稿の詳しい論述については、次の二つの論文に譲る。一つは、これと同じ表題で勝呂教授記念論文集に投稿したものの、もう一つは、「原始経典における解脱の究極態——大乘経典を望む——」という表題で、東方学会の記念論文集に寄せたものである。いずれも近いうちに刊行される予定である。ここではスペースの関係からごく要の所のみを記述する。

この論旨は、先に発表した「縁起の真意——原型への復帰——」<sup>(1)</sup>という論文に深くかかわっている。その論文の要旨は次のとおりである。

明白に縁起の甚深なるを見たとき、感動的に告白するアーナインダを、ブッダはきびしく叱る、ダンマに目覚めて通達しなければ、ムンジャ草やパッパジャ草のように、纏れて覆わ

れるのみで、苦界・悪趣の輪廻から脱することはできない、と。この経緯から見ると、六、七十年来学界において論議されてきた縁起観は、単に分別上の妄論に過ぎないことが知られる。

では、縁起の真意とは何か。ことに、ダンマが顕わになることよって目覚めたブッダの解脱と、縁起とは、どう関わるのか。この問題を資料の上で突き詰めてみると、結局、順観（連鎖関係の生起）と逆観（連鎖関係の消滅）とが並立している点にある。というのは、逆観は解脱の側面を示しているのであるから、順観は逆観にどう関わるのか、いいかえれば、いかにして順観と同時に逆観であるといい得るのか、という問題に帰着するからである。

この問題の解決は容易ではなかった。たまたま、梵本『八千頌般若』第二十八章「散華如来」に縁起 Pratisamsamutpada について集中的に説かれている箇所を熟読玩味するこ

とによって、明瞭に領くことができた。拙論のその部分をよく読んで欲しい。そして気がついたことは、順観であると同時に逆観であるということが、実は『ウダーナ』あるいは『律蔵』における、解脱直後の初夜・中夜・後夜の三つの偈として、簡潔に示されていることである。すなわち、ダンマがゴータマの全人格体に頭わになって一切の疑惑が消滅するが、初夜においては因縁が知られ、中夜においてはその因縁が消え、後夜においては、ダンマがゴータマの全人格体を通じて魔軍を粉碎し、あたかも太陽が虚空を照らすように全宇宙を照らし抜く、という。

つまり、ダンマが頭わになることによって、因縁が現われると同時に消え、ついにダンマは全宇宙を照らし抜くことになる。そして、この後夜の、ダンマの頭わになる完結態が、『大般若波羅蜜多經』第一章「縁起品」として示されている。そこでは、世尊は師子座に結跏趺坐して三昧に入り、体から無数の光明を放って三千大千世界を照らし、そのなかの衆生、光に遇うものは究極の悟りを得る、という。ここでは連鎖関係の因縁についてはまったく触れておらず、しかもそれを「縁起品」と称している。まさしく、後夜の一偈に相当する。

これまでの論述を総括すると、縁起とは、ダンマがブッダの全人格体に頭わになって通徹し、ついにその全人格体から

放出されて全宇宙を覆い、そのなかの衆生を済度することに外ならない。以上が、拙論「縁起の真意」の要旨である。

ところで本論は、まったく別の視点から縁起の真意を明らかにしようとするものである。それは、同じく原始經典『パヤ・ベーラヴァ・スッタ』*Bhaya-bherava-sutta*が、このことを解明しているということができる。したがって本論は、この經典を解説することによって、その真意を確めようというのである。

## 二 ブッダの回顧談

### 1 三昧と智慧の成就に至る

この經典は、ブッダ自身が昔を振りかえって、まだ悟りを開かない前から修行を続けて、ついに初夜・中夜・後夜に至って悟りが開かれたことについて、弟子たちに説法したものである。いわばブッダの回顧談である。しかし、単なる回顧談ではなく、弟子たちに対する教育的意味が多分に含まれていると思われる。したがって、初夜・中夜・後夜におけるブッダの解脱とはどういう意味かということについての、きわめて適切な解説書であるということができよう。

まず經典は、未悟の菩薩（すなわちゴータマ）にとって、次のような行法を順を追うて説いている。

1、清浄な身口意の三業、および清浄な生活。2、貪欲・瞋恚を離れて慈しみの心をおこす。3、憎沈・睡眠・掉挙を離れる。4、寂靜の心。5、疑惑を離れる。6、自讃毀他を離れる。7、少欲。8、精進。9、念の現前。これを見ると、ブッダ自身がこれに類した修行を続けてきたともいえようし、また弟子たちが解脱に達するように指導的な意味も十分に含まれているともいえよう。

そして、右の行法の最後の「念の現前」に続いて、三昧成就と智慧成就とが実現するというのである。三昧と智慧との成就、つまり定慧二字の成就であるから、これはすでに解脱に差しかかっているということが出来る。しかも、長いあいだおびやかされてきた恐怖・畏れ・驚ろきから、完全に離れることができ、行住坐臥、いついかなる時も、もはや恐怖・畏れ・驚ろきにつきまとわれることはない、という。この經典の表題であるバヤもペーラウァも、恐怖・驚ろきという意味で、それが表題となっている程であるから、このことがいかに重要であるかが知られる。

われわれにとつて、ブッダの道を学べば学ぶほど、三昧と智慧の成就是、ますます全人格体に滲透し通達してくる。その状態では、恐怖・畏れからまったく解放されている。しかし出定して日常に戻れば、恐怖・畏れがないということはあり得ないが、それでも徐々に薄められていくことは事実である。

禪定から解脱へ(玉城)

る。

さて、ブッダはこのようにして、不退の精進をおこし、念は確立し、体は軽安となり、心一境となって三昧に入っている。そのとき、ブッダの心に浮んで来たことが、実はこの經典における最大の注目点なのである。

## 2 最大の注目点

いったい、どういう内容がブッダの心に浮んで来たのだろうか。

「わたしこそ、多くの衆生の利益、bahujanahitaのために、多くの衆生の衆、sukkaのために、世に對する憐愍、lokankampaのために、諸人と人間の利益と衆のために、世に現われる、loke uppanno ところの、迷妄なきもの、asammoha-dhammo satto であると、認知するに至った。」

この一節は、きわめて重要な意味を担っている。というのは、ブッダにはすでに、衆生利益、世間憐愍のために世に現われたという意識が生じており、それは、続いて論ずるように永遠の如來の自覺につながってくるからである。たとえはこの一節は、『アングッタラ・ニカーヤ』第一集のなかでは、すでに解脱を成就したブッダが、比丘たちへの説法として示されている。

「比丘たちよ、世に現われる、loke uppajjāmano ところの一人

ekapuggala は、多くの衆生の利益のために、多くの衆生の樂のために、世に対する憐愍のためは、諸人と人間の利益と樂のために見られる。一人とは誰であるか。如来・阿羅漢・正等覚者である。……

比丘たちよ、一人が世に頭むになること、pātrbhāvo lokasmin は得がたい dallabha。一人とは誰であるか。如来・阿羅漢・正等覚者である。……

比丘たちよ、世に現われるところの一人は無二のもの aduttīya 伴なきもの asahaya、無比のもの appatima、対比なきもの appatisama、比類なきもの appatibhaga、比肩者なきもの appati-puggala、等しからざるもの asama、等しきものなきもの asam-asama、人間のなかの最高のもの dipādānam agga として現われる。一人とは誰であるか。如来・阿羅漢・正等覚者である。」

この一節は、「多くの衆生の利益のために、……諸人と人間の利益と樂のために、世に現われる」という一文を含んでいるばかりでなく、その主体は、如来・阿羅漢・正等覚者たる一人であるということが説かれている。しかもそれは、「無二のもの、伴なきもの、無比のもの、……」とあるように、絶対唯一のものたることが強調されている。

実は、「如来・阿羅漢・正等覚者」については、別稿に詳しく論証したように、原始經典から『法華經』へ受け継がれており、それは永遠の如来として示されている。その『法華經』の一節を挙げてみよう。

「衆生に如来の知見、tathagata-jñāna-darsana を教化、gamadāpana するために、如来・阿羅漢・正等覚者は世に現われる。loka ut-padyate。衆生に如来の知見を示す、sambhūta-darsana ために、如来・阿羅漢・正等覚者は世に現われる。衆生を如来の知見に入らしめる avatāraṇa ために、如来・阿羅漢・正等覚者ために、如来・衆生を如来の知見に目覚めさせる、pratibodhana ために、如来・阿羅漢・正等覚者は世に現われる。……シャーリプトラよ、これが如来の一つの仕事 eka-kṛtya、一つの為すべきこと eka-karaṇīya、大なる仕事 mahā-kṛtya、大なる為すべきこと mahākaraṇīya であり、世に頭むになるための一つの目的 eka-prayojana である。」

右の梵本『法華經』の一節は、漢訳『妙法華』「方便品」の、いわゆる開示悟入の一文である。それが永遠の如来の働きを示していることはいうまでもない。

かくして、原始經典から大乘經典『法華經』にわたって、「衆生利益のために世に現われた如来・阿羅漢・正等覚者」は、永遠の如来であることを示している。ただ原始經典においては、右の例文からも知られるように、ブッダ自身がその如来であるという自覚を持っていたともいえるし、あるいはブッダにとって第三者として永遠の如来を説いていたともいえる。いずれにしても、ブッダは、永遠の如来のもっとも十全な実現者であると仰がれていたことが頷かれる。

### 3 解脱の究極態

#### a 究極態への前提

さて、本經典に戻ってみよう。すでに述べてきたように、三昧と智慧の成就によって、恐怖・畏れ・驚ろきから解放された菩薩（ゴータマ）は、衆生利益のための如来出現の確信にまで達している。そしてこの菩薩は、初禪・二禪・三禪・四禪の三昧に入るのである。その道程は、禪定が深まるにつれ、尋・伺のごとき微細な心の揺れが静まり、さらにその奥にある、いい知れぬ喜び（喜）や安らかさ（楽）も消えて、ついには一切から離れ切った捨念清淨の境地にまで至る。

この禪定の道程が、ダンマ・如来によって催され、導かれ、いいかえればダンマ・如来の独り働きであることは明らかであるといわれなければならない。なぜなら、すでに衆生利益のための如来出現の事実が、菩薩自身の体得として認知されているからである。それは、菩薩の人格体を通しての、永遠の如来の働きである。

この如来の働きが、菩薩自身の体得として、どのような自覚内容になっているか、ブッダの別の説法から明らかにしてみよう。というのは、本經典に続いて説かれる初夜・中夜・後夜の解脱を考察する上に、そのことが不可欠の前提となるからである。

#### 禪定から解脱へ（玉 城）

ブッダの別の説法というのは、念仏 *buddhanussati* について弟子に説かれたものである。<sup>(8)</sup> その要旨は次の如くである。

如来を憶念すると、心は貪・瞋・痴の煩惱から解放され、如来に対して正直となる。正直となれば、ダンマはいつものまにか体に滲みこみ、ダンマを伴う悦びとなり、やがて喜が生じ、さらに深まると体が軽安となり、次に楽を受け、ついには三昧に入り、「ダンマの流れとなったもの」*dharmasota-samāpanna* となる、という。

これが念仏の帰着する境地である。如来を憶念することによって、煩惱が消え、やがて喜となり、楽となり、ついには喜も楽も消えて三昧に入り、「ダンマの流れとなったもの」となる。先の四禪の最後の境地である捨念清淨が、ここでは「ダンマの流れとなったもの」となっている。

いったい、*dharmasota-samāpanna* とは、どういう状態であろうか。それは、単に捨念清淨という表現から、さらに踏みこんで考察してみなければならぬ。そのためには、ブッダの説法に学ぶ私自身の禪定にもとづかねばならない。

私はこれまで *dharmasota-samāpanna* を「ダンマの流れに入れるもの」と解していた (*sam-ā-√pad, to fall into any state or condition*)。しかるに「昨年（平成五年）頃から、禪定がダンマ・如来の独り働きとなって以来、連日入定している

うちに、ますます深刻に独り働きが全人格体に通徹し、結局は、全人格体がすなわち独り働きであり、独り働きがそのまま全人格体となる。そうしてみると、「ダンマの流れに入れるもの」という如く、流れと体と隔たりのあるものではなく、体そのものが流れとなり、流れそのものが体となって、体と流れとが一体となっていることが知られる。すなわち、*dhamma-sota-samāpanna* は、「ダンマの流れとなったもの」と解されるのである(*sam-a-vpad, to attain to, undergo, complete, accomplish*)。

さらに、この禪定を持續していくと、どうなるのか。これについてもはや詳論する余裕はないが、簡潔にいえば、ダンマ、如来の凄まじいエネルギーが全人格体に奔騰し、それが体の無数の箇所から、空間に向って限りなく放散されていく。もとより業熱体の底知れぬ執は、根こそぎに転換されて、ただひとえに如来の独用となっている。放散されていくエネルギーを、心静かに審察すると、一つにはどこまでも生きとおしていく大いなる智慧と、二つにはありとあらゆるものを包みこみ、滲透していく大いなる慈悲と、この二つが渾然一体となっていることが知られる。

これはまさに、先の拙論「縁起の真意」の結びに、『大般若波羅蜜多經』「縁起品」の「世尊は師子座に結跏趺坐して三昧に入り、体から無数の光明を放って三千大千世界を照ら

し、そのなかの衆生、光に遇うものは究極の悟りを得る」とある一句と、まったく同質ではないか。もとより規模においては天と地の開きはあっても、質においては同一である。つまり、入定している私自身は、世尊と同じく、体から如来のいのちを放散していると同時に、光に遇うて初めて悟りを得るさまよえるひとりの人間である。光に遇う人間であると同時に、光を放つ世尊である。

何と不思議な世界ではないか。まさにここに現成しているこの根源の事実を前提として、はじめて初夜・中夜・後夜のブッダの解脱が領かれてくるのである。

#### b 究極態の実情

まず、『ウダーナ』における解脱直後の三夜の偈と、本經典の三夜の偈とを対照してみよう。前者における共通の発句は、「*ダマ*が熱心に入定している、バラモンに頭わになる」という一節である。これに対して後者に共通なる句は、「不放逸に、熱心に専念しているものにこそ、無明が砕けて明が生れ、闇が砕けて光明が生れる」というものである。互いに表現は異なるが、その意味は同質であると見てよい。

しかるに解脱の内容となると、両者はまったく異なるのである。

第一に初夜である。前者では、「ダンマが頭わになり、一

切の疑惑が消滅し、因縁が現われる」というものである。これに対して後者では宿命通が説かれている。すなわち、一生、二生、十生、二十生、百生、千生、さらに無数の成劫、壞劫、成壞劫、およびそのなかにおける名、族、階級、そして苦楽を経験し、生死を繰り返したことを想起する、というものである。

第二に中夜である。前者では、「ダンマが顕わになり、……因縁が消える」というのに対して、後者では天眼通が示されている。すなわち、天眼によって衆生の生死のすがたを見る。衆生は業に随って、貴賤、美醜、禍福となり、悪行を働くものは、苦界・悪趣・地獄に墮ち、善行をなすものは、善趣・天界に生れる、という。

第三に後夜である。前者では、「ダンマが顕わになり、太陽が虚空を照らすように、魔軍を粉碎して安立している」のに対して、後者では漏尽智である。すなわち、苦集滅道を如実に知り、愛欲・生存・無明の煩惱から解脱し、さらに「解脱においてもなお解脱する」という智慧が生じ、生は尽き、梵行は完成し、なすべきことはなされ、もはや輪廻の状態に至ることはない、という。

さて、先に述べた前提において本經典の三夜を見るとき、その内容はおのずから明らかであろう。衆生利益のために現われた如来の光明は、宿命通において時間的に縦に貫ぬき、

天眼通において空間的に横に拡がり、かくして一切衆生はどこどこと光被せられる。そして漏尽智において、衆生はどこまでも解脱せしめられていく。しかもそのままが如来自身の解脱なのである。

1 「縁起の真意——原型への復帰——」『印度学仏教学研究』八三号所収、平成五年十二月。

2 *Bhaya-berava-sutta*, MN, vol. 1, pp. 16-24.

3 *ibid.*, p. 21.

4 *Ekaggala-vagga*, AN, vol. 1, p. 22.

5 「法華仏教における仏陀論の問題——原始經典から『法華経』へ——」『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収、昭和六十年、平楽寺書店。

6 *Saddharmapundarika-sutra*, Vaidya Ed., p. 27<sup>o-16</sup>.

7 『妙法華』「方便品」第二「大正九・七上」。

8 *Anussati-vagga*, AN, vol. 1, p. 329.

〈キーワード〉三昧と智慧の成就、最大の注目点、解脱の究極態

(東京大学名誉教授・文博)